

## 内山秀夫学長に聞く



赤塚は新潟市の西端にあり、角田・弥彦の山峰をい

だく蒲原平野の眺望が大きくひらけたところ。この地に国際情報大学が九四年（平成六）四月設立され、今年ではじめての卒業生を社会におくりだします。

入学者の九割近くが県民の子弟というこの大学は

「・・・対岸のロシア・中国・韓国・北朝鮮などの環日本海諸国・地域との人的・物的交流が活発化するなか、国際的視野のもとに情報化の推進に寄与できる有為な青年の育成を求める地元の熱い期待」を背景に「県・新潟市その他の周辺市町村の多額な助成を得て」設立

されました。

「・・・学内には地域連絡協議会という組織が機能して」いて市民参加で大学が地域にどう開かれていったらよいかも追求されています。

（検証 『平成の大学』現代書店一四二、一五四頁）

その建学の志、その教育内容を学長内山秀夫氏に語っていただきました。そのお話は生粋の江戸っ子らしく率直で、ゆたかな教育哲学に裏打ちされた平易で有意義なものでした。

独立の大学―地域にいきる意味

戦災にあい、少年期の想い出の学び舎も空襲で焼かれました。青年期に学んだ慶応大学の三田もかつての学生の街の様相を失いました。街と学園の人間関係がとて薄くなっています。いまでも多くの人が大都会でくらし、故郷を喪失した人間になっています。

大学設立にかかわって四年、開設されてから四年、新潟での生活は暮らしやすく愛着をおぼえています。

県民のみなさんが生活の拠点としての故郷をもち、その良さを愛しておられるのがよくわかります。

入学してきた学生に『地域』とはなんだという問いを發しました。でもかれらはよく答えられません。

私は「君達が今まで学校に通っていた親がかりの生活の延長ぐらいに卒業後の生活を安易に考え、楽をするために地元企業き就職しよう、そのために地元大学へというのでは君達の人間の成長もこの大学の発展も見えてこないよ。」と語ります。

学生たちはこの国際情報大学設立の原点の一つである「地域立の大学」ということをしっかり掴んでほしいと心から願っています。

私は『地域』とは一言でいえば「そのひとがそこに生まれ、育ち、死んでいくところ、そのひとの暮らしの場、生活の拠点」ということだと思えます。その意味で、『地域』を再発見してほしいのです。地域をどう見ると言う事はその人の存在してきた意味をどう再認識するかということでもあります。

さらに、学生には自分の生まれ育った地域の課題を明らかにしておくだけでなく、地域立のこの大学の存立の条件もはっきり掴んでほしいと思います。

私は学生に「大学存立の条件の一つ、大学の財源も君達の親に負担していただいた三倍を県や周辺自治体などに出していただいている。その財源になかにはここに学ぶ君達以外の県内の六割の勤く若者が収めた税ももちろん入っている。そんな人達の暮らしやすい地域」があつてこの大学もまた発展していくことも気づいてほしい」といいます。

大学も『地域立』という内容を追求していくことがかかせません。それは単に大学側が公開講座などに市民を呼び込むといったことでなく、地域の中で私たち大学人が市民の方々と共に生涯学習の講座をつくりあげていく、地方自治体の生涯教育のシステムをその自

治体 $\parallel$ 地域の特性をいかして作りあげていく、その一翼をになうことに努力をしてみました。新潟市とのつながりに比して西蒲原以西への取組が弱かったと反省していますが……。

学生たちにも大学を生涯教育の一環ととらえて、ここで、市民とも交流を深めて自分で自分をどう組み立てていくのか、人と人との間柄をどう造っていくのか学んでほしいと要求しています。そうしてこそはじめて“地域”に生きるといふことが視野に入るので。

はやり言葉のように「人にやさしい社会」とか「活性化」をつかうのではなく「人にやさしい社会」とはやり直しのきく社会であり、「活性化」とは自分のやりたい事をみつけそれをお互いに大切にしようことなのですから、まず現実をきちんと学び、その内実の実にむけてのプロセスをひとつひとつたしかめるなかで人として成長してほしいのです。

### 西まわりで世界と新潟をみよう

#### —国際化・情報化をかんがえる—

この大学を手っ取り早く「国際情報」を手にいれるための大学と早呑み込みされるとこまります。国際化

社会とか情報化社会とかいう言葉はなんとなくいまの社会状況を示す「便利語」にすぎないので。

情報系のこの大学設立には新潟県、新潟市の今おかれている北東アジアの中での状況に応える力をもった有為な若者を育ててほしいという地域の願いが強く反映していることは確かですが……。

二十一世紀にさらにおおきくうごきはじめる中国、シベリア（ロシア）、朝鮮半島（韓国・北朝鮮）のことは国際社会の重大関心事の一つです。これらの地域に最も近い日本、とくに新潟がどうこれにむきあうかが問われています。

「国際化」とはどの地においても宇宙船地球号の一員としてのグローバルな価値観 $\parallel$ もの見方が必要な時代にはいったということ。グローバルな価値観、それは現にある異文化、たとえば宗教や民族のちがいを相互に理解し合いつつ共存していくという課題を解決しつつ成立していくでしょう。

この大学の「情報文化学科」は日本文化の根本理解、異文化理解、コミュニケーション研究の三つのステップをふみながら先述の課題に挑戦していきます。学生たちには卒業までに中国、ロシア、韓国のいずれかを



専攻領域として選択して学び、その国の言語にも通じ、その地におとずれて体で異文化との交流を体験してくようにしています。

アメリカで学んだ私自身がいつもアメリカからものを見るということで西（アジア）から物を見ていくことに慣れていません。学生たちは上記のようにユーラシア大陸にきちんとむきあうわけですから、韓国、北朝鮮、中国、ロシア、そしてヨーロッパ、最後がアメリカとみていく必要があります。身近なことをまずよく知ることはとても大切なことです。そんな意味での大学の名称を「新潟ユーラシア大学」とするののもわるくないなと思ったりしたこともあるのですが。

もう一つの学科は「情報システム学科」です。情報という企業情報とか官庁の情報公開とかを連想されるひとも多いのではないかと思います。企業の利潤のためや行政の権力擁護のための情報管理もありますが、先の国際社会のなかで相互に「情報文化」を伝え合うシステム、相互理解を促進するシステムをコンピュータを駆使してつくりあげていくことを学ぶということになります。

### ゼミナールが学ぶ意識を育てていく

一年からゼミをひらきました。教員の数だけ「塾」があるようなものです。いろいろな問題をなげかけています。「国際化とよくいうけれど日本人一人一人が中国人、ロシア人、韓国人の友人を何人かもてば、何千万の友人ができるよ。そんな時代がくれば戦争なんかおきるかな、国際化ってそんなふうに具体的にとらえたら？」。こうして彼等も考えを深めていきます。

このような対話のなかで私たち教師との距離が近づきます。

わたしたち県内の新設私立大学の幾つかの学長さんと高校の校長さんたちとの交流もインフォーマルなものです。がはじまりました。一貫した生涯教育のそれぞれの部分としてどんなふうにもどもたちを育てていけば良いかお互いに出し合っています。それぞれの教育現場の改善につなげたいのです。

県民の子弟をあずかる大学は始まったばかりです。長い目で見守って欲しいとおもいます。

（文責・本田敏彦）